

古事記神話と言霊信仰

博士前期課程一年 三田 徳明

古代に存在したとされる「言霊信仰」に照らして考える時、古事記の中の神々の発言は当然、その通りに現実化すべきものである。

このような神の発言の初出は、天つ神の「この漂へる国を修め理り固め成せ」という言葉である。

従来この言葉は「国生み」によって達成されると解釈されているが、西宮一民氏は「国作り」の概念を「国生み」「神生み」「葦原の中つ国の国作り」の要素を包括するものと考えておられ、氏の説によれば、オホクニヌシの「国作り」が行われることで初めて国が完成することになる。

しかし、国作りに続く、オシホミミの中つ国への降臨失敗の伝承をみる時、「修理固成」の言葉が実現する時期を更に下げて考える必要があるように思われる。

佐佐木隆氏によれば、支配者は国見に際して、その治めるべき国土の優越性を「言霊」の働きを持つ「言葉」によって具体的に讃め称える事により、国土の豊饒と支配権の安定が保証されるといふことである。

佐佐木説に従えば、高天の原の使者が、オホクニヌシ父子から実現されるべき「言葉」として「国譲り」の承諾を得ることに成功し、これを承けて中つ国に降臨した天孫ニギが「国見」を行なう事で葦原の中つ国は高天の原の秩序の下に、冒頭の「修理固成」の言依さし通り、真に「完成」するのだといえよう。

すなわち、古事記の上巻は、その冒頭で天つ神が発した「言葉」が「国生み」「神生み」「国作り」「天孫降臨」「ニギの国見」と段階的に実現してゆく物語として全体を解釈することができるのである。

しかし神々は時に、この物語のあるべき方向に対し、逆の意味を

持つ「負の発言」をしてしまい、その言霊の力によって、物語の順当な進行が妨げられてしまう事がある。

天の浮橋から下界を臨んだオシホミミが発した負の発言が、二度にわたる中つ国言向けの失敗として現実化したという事は、佐佐木氏によって既に指摘されているところである。

さらに私見では、イザナキ・イザナミに関わる神話にも、同様な記事が認められる。

二神は国生みに先立ち、互いを賛美し合う言葉が発したにも拘らず、イザナキは女神から先に声をかけた事に「女人先に言へるは良からず」という「言葉」によって負の意味付けをしてしまう。「出来損ないの子の誕生」さらに「イザナミの死」「黄泉国訪問」「事戸度し」に到る一連の負の出来事はこの負の発言が引き起こしたものだと思える。

このような事態を打開するためにイザナキは「禊」をするが、これに先立って「あは、いなしこめしこめき穢き国に到りてありけり(甲)。かれ、あは御身の禊せむ(乙)。」という言葉を発している。上でこの負の要素を相殺すべき(乙)という言葉を発して、甲から乙へ、言霊を「負」と「正」の両方向に二重に働かせることで禊の完遂を保障するのだといえよう。

このような言霊の働かせ方は、延喜式祝詞所収の大祓詞と、その構造を共有するものである。

つまり、負の言葉の力により、物語が一旦横にそれたり、逆の方向に進行するような事があったても、禊の際のイザナキの言葉や、オホクニヌシ父子の国譲り受諾の言葉の様に、負の発言を帳消しにする言葉が、改めて発せられる事によって、話の筋は、冒頭で天つ神が発した「この漂へる国を修め理り固め成せ」という言葉が、その通りに実現して行く物語へと戻って行くのである。

以上のように、神々の発する言葉に焦点をあてて古事記神話を見る時、常に物語は、神々の発言が現実の事として実現してゆく事によって進展しているように思われるのである。